



「マスギャザリングと感染症」の連載にあたり

まつもと てつや
松本 哲哉
Tetsuya MATSUMOTO

“マスギャザリング”という言葉を目にする機会が増えている。日本語では“集団形成”と表現される場合が多いが、その定義は「一定期間、限定された地域において、同一目的で集合した多人数の集団」とされている。わかりやすく説明すると、祭りやコンサート、スポーツなどの行事や催し物などへの参加を目的に、多くの人が特定の地域に集まることを指している。すでに国内でもマスギャザリングに当てはまることはこれまで多く行われてきた。しかし、最近、特に注目を集めるようになった背景には、やはり 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックの影響が大きいと思われる。

今回、マスギャザリングが重視される理由は、従来の国内でのマスギャザリングと比べて、東京オリンピック・パラリンピックでは集まる人数の規模が並外れて大きいことが考えられる。すでに海外から日本に来られる旅行者は年間 3,000 万人を超えており、来年は 4,000 万人に達すると想定されている。特に東京オリンピック・パラリンピック開催期間中は多くの人達が会場に集中して、ごった返す状況が考えられる。そうなる、もし感染者がそこにいて、病原体を周囲に拡散させたとしたら、相当な数の人が感染するであろうことは容易に理解できる。

さらに今回のマスギャザリングにおいては、インバウンド、すなわち海外からの入国者によって、国内では通常見られないような種類の感染症が持ち込まれる可能性も無視できない。極端な例かもしれないが、もしオリンピックの会場にエボラ出血熱が疑われる人が参加したとしたら、マスコミが騒ぎ立てて国内は大きなパニックに陥るかもしれない。すなわち、感染者がたった 1 人であっても、マスギャザリングで起こり得るインパクトは計り知れない。エボラ出血熱は極端な例だとしても、私たちが普段遭遇することのない海外の感染症は多々あることを認識しておかなければならない。

また、マスギャザリングはバイオテロの格好のターゲットになり得ることも重要である。爆薬を用いたテロはその場で大きなインパクトを与えることができるが、バイオテロの場合はすぐに発症するわけではないため実施直後のインパクトは小さい。しかし、引き続いて起こる二次感染、三次感染の可能性を考えると、社会に与える影響はむしろ大きいと考えられる。

以上述べたように、マスギャザリングにおいて感染症への対応は不可欠である。また、誰しもが遭遇し得ることであるため、多くの方々に認識を深めていただくことが必要である。そこで本シリーズでは、各領域の専門の先生からマスギャザリングにおいて重要な感染症について解説していただき、取るべき対策について説明を加えていただく予定である。なお、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックが終わっても大阪万博などが控えており、マスギャザリングの課題は今後も続いていくことを最後に強調しておきたい。